

第4章 木と生きる

～人の成長と木の関係～

ここでは、人の成長の過程を追いながら、木との関連を学ぶとともに、「感じること」の意義、重要性について理解しましょう。また、木が人にもたらす癒しの効果についても学びましょう。



1 子どもの発達の特性と過程

ここでは、木育プログラムを参加者の成長段階に応じたものとするため、子どもの発達や遊びの意義などについて学びましょう。

木育とは、「子どもをはじめとするすべての人が、木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと」です。したがって、木育活動の達人には、子どもから大人までの幅広い参加者が、主体的に木や森と触れ親しめる内容のプログラムを作成していくことが求められます。

その中でも、子どもたちがどのような形で木育に出会うかは、その後の「つながり」に大きな影響を与えることとなります。「子どもは大人の縮図ではない」と言われますが、その年齢ごとの特有なものの見方や感じ方など、大人とは違った心理的世界を持っています。

乳幼児や児童の発達の特性と過程をたどりながら、「人が育っていくこと」の意味を考えてみましょう。

(1) 乳幼児の発達

乳幼児期は最も急速に発達が進む時期です。乳幼児の各期における発達の特徴をまとめると次のようになります。

● 6 ヶ月未満児

- ・首がすわる
- ・寝返り、腹ばい
- ・急激な環境の変化に対応した著しい発達
- ・特定の大人との間の情緒的な絆

● 6 ヶ月から 1 歳 3 ヶ月未満児

- ・はいはい～つかまり立ち
～伝い歩き～自立歩行へ
- ・腕や手先の意図的運動と探索行動
- ・情緒的な絆の深まりと人見知り
- ・気持ちの交流
- ・簡単な言葉の理解

● 1 歳 3 ヶ月から 2 歳未満児

- ・調整しながら歩く
- ・言葉の増加、対話の芽生え、意思の交流

● 2 歳児

- ・語彙の増加
- ・行動半径の広がり、探索行動
- ・自我の表れ、盛んな模倣

● 3 歳児

- ・基本的な運動機能の伸びと基本的な生活習慣の形成
- ・知的興味や関心の高まり

● 4 歳児

- ・バランス能力の発達
- ・身近な環境への積極的な関わり
- ・想像力、目的意識、試す心、不安、葛藤かっとう
- ・友だち関係の広がり

● 5 歳児

- ・基本的生活習慣の確立
- ・目的ある集団行動
- ・思考力の芽生え

● 6 歳児

- ・巧みな全身運動
- ・自立と協調の態度
- ・自信、予想・見通す力、意欲
- ・自然事象、文字などへの興味関心の深まり



木とふれあい、
木に学び、
木と生きる

(2) 学童の発達

学童期は、人格の基礎が形成される幼児期と、大きな身体的変化とともに精神的に親から自立し自己を確立していく思春期との間にあります。

一般的にはこの時期の子どもたちは情緒的に安定し、外部の世界への関心や好奇心を高める時期と言われていますが、学童期を前後半に分け、その特徴をまとめてみると次のようになります。

●学童期前半

母親や、母親的な人物や家族などの狭い範囲だけでの関わりから、拡大した他者（友達や先生、地域や大人）との関係が始まります。その中から好奇心や欲求を持つようになり、物事を探究し始めていく時期です。



●学童期後半

親からの自立を目指して、親や教師との関係よりも、学校の友達との関係が重要な意味を持つてくる時期です。また、具体的思考から抽象的な思考への転換期になります。

(3) 発達を支えるもの

このように、人はいくつもの段階を経て発達し、成長していくのです。そして、それぞれの発育段階における大人の関わり方が非常に大切になります。

以下に、「保育所保育指針（厚生労働省発行、保育指針研究会編集）」を紹介しますので、子どもの発達を支えるものについて学んでみましょう。

① 心のよりどころとしての大人

●信頼感・安定感

子どもは、身体的にも精神的にも未熟な状態で生まれ、大人に保護され、養育される。その際、大人と子どもの相互作用が十分に行われることによって、将来に向けての望ましい発育・発達を続け、人間として必要な事柄を身につけることができる。中でも重要なことは、人への信頼感と自己の主体性を形成することであり、それは、愛情豊かで思慮深い大人の保護・世話などの活動を通じた大人と子どもの相互関係の中で培われる。子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることによって、自分も大人を愛し、信頼していくようになる。大人との相互作用によって情緒的に安定する。

② 子どもの主体的な活動

●自己充実感・能動性

大人の期待に自ら応えようという気持ちが育ち、次第に主体的に活動するようになり、さらに、きょうだいを始め周囲の者に対して関心を持ち、関わりを広め、増やしながら、自我が芽生えてくる。

③ 応答的環境・人との相互作用

●有能感・信頼感、個性の理解と尊重

このように発達初期に自分の行動を認めてくれる大人と相互関係を持つことにより、その後の一層の発達が促される。子どもは自発的に身近な事物や出来事に興味や関心を示して働きかけたり、積極的に特定の大人との関係をつくらうとするなど、自分の気持ちを明確に表現し、自分の意思で何かをするようになる。このようにして、自分が主体となって選択し、決定して行動するという自己の能動性に自信を持つようになり、言葉や思考力、自己統制力を発達させていく。

(以上「保育所保育指針」から抜粋)

2 木育の感性と人を癒す木の働き

自主的に学びたいと思う動機は「不思議だな」と思う気持ちであり、特に子どもたちは「遊び」の中でそれを育んでいきます。

木のおもちゃで実際に遊んだり、「森林療法」「森林療育」「森林カウンセリング」について学んだりすることで、木が人に与える癒しの力を感じましょう。

木育は特に身構えて行うことではなく、いつからでも、どんな小さなことからでも始められます。でも、なかなかその機会を持たずにいる人も多いように思います。木育活動の担当者や企画立案者（コーディネイター）は、そのきっかけを多くの人に届ける役割を担っています。木育は、従来の森林環境教育や木材利用促進にとどまらない「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みですが、特に子ども対象のプログラムを実施するためには「子どもと遊び」について理解しておくことが重要です。

また、「ちゃいろの木（木材のこと）」で遊んでみることや「みどりいろの木（樹木のこと）」を生かした実践を知ること、「木と人の関係」や「人も自然の一部である」ということを実感できるプログラムについて考えてみましょう。

（1）子どもにとって遊びとは

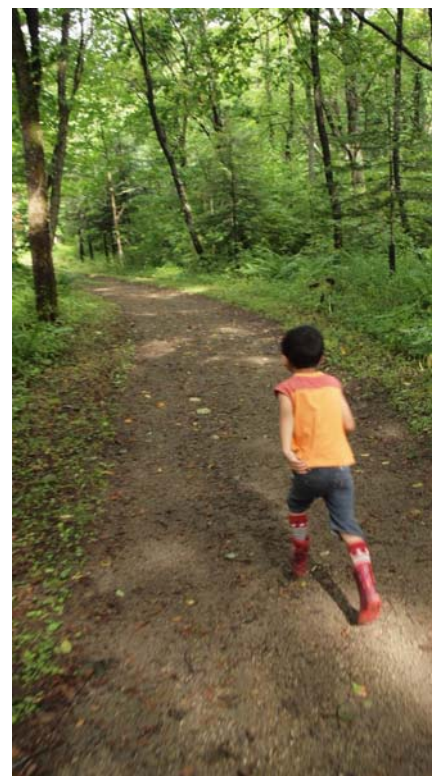
健康な子どもたちは、邪魔されることがなければ、6歳頃までに1万5千時間、学童期でも1万時間を遊んで過ごします。子どもにとっての遊びは生活そのものであり、遊ぶこと自体が目的です。大人にとっての遊び（レクリエーション）と子どもにとっての遊びは本質的に違うものなのです。

子どもの遊びは、子どもたちが自分に合ったやり方で、今まで知らなかったものへ慣れ親しんでいく過程です。子どもは知りたがり屋で、その好奇心が行動の最も重要な原動力です。子どもは、誰でも遊ぼうとする姿勢を生まれた時から持っています。しかし、自発的に集中力を持って人や物、出来事にぶつかっていく能力が発達するかどうかは、責任ある大人たちの態度いかんによるのです。

（2）子どもの遊びを理解するには

このように、子どもにとって遊びは、発達する上で欠かせない重要な行動です。子どもの遊びを理解するには、次の点に注意する必要があります。

- ・遊びの場をつくる
- ・できるだけたくさん遊ばせる
- ・遊びを中断、無理強い、扇動しない
- ・子ども自身に試させ、十分やらせる
- ・批判、手直しをしない
- ・真面目な関心を寄せ、安易にほめ過ぎない
- ・一人遊びの機会を与える
- ・複数の子どもたちと一緒に遊べるよう協力する
- ・子どもの持ち物を尊重する
- ・男の子用、女の子用とおもちゃの区別をしない
- ・後片付けを大嫌いな作業にさせない



(3) 自然は感性を育む最高の遊び場

地球上の全ての生物が命を営む自然は、神秘さや不思議さに満ち溢れています。

そんな自然は、子どもたちの感性を育む最高の遊び場だと言えるでしょう。



神秘さや不思議さに目を見張る感性を育むことが子どもの発達に非常に大切であることを、レイチェル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』は教えてくれます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない<センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性>を授けてほしいとたのむでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる怠慢と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。

『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン、訳・上遠恵子（新潮社）から



(4) ちゃいろの木の世界

～人を癒す木のおもちゃ～

「おもちゃはその国の文化水準を表す」と言ったのは、中国の作家、魯迅ろしんです。今、子どもたちの周りにはたくさんのおもちゃが溢れていますが、本当に子どもを大切にしているものかどうか、大人はもう一度見つめ直して見る必要がありそうです。

木はおもちゃの素材として大きな魅力を秘めています。例えば、木と木がふれ合う優しい音の「ガラガラ」は、お母さんの声と同じように赤ちゃんの耳に届きますし、積木は手に自然な発汗を起こし、木のぬくもりと重さが遊びに安定感を与えます。

実際におもちゃで遊んでみることで、良いおもちゃの条件を考えてみましょう。



木とふれあい、木に学び、木と生きる

(5) みどりいろの木の世界

～森の癒し「森林療法」とは～

私たちは緑に包まれると安心し落ち着きます。心身がリフレッシュし、元気になります。私たちは生まれながらにしてそのような仕組みを体の中に持っているのかもしれませんが。軽井沢での療養生活で結核を治癒した精神科医の神谷美恵子氏は、著書『生きがいについて』の中で「自然こそが人を生み育て出した母胎であり、いついかなる時でも傷ついた人を迎え、慰め、癒すものであった。」と述べていますし、古くは古代ギリシャの医学者ピポクラスの言葉として「自然は全ての病を癒す」が伝えられています。

森林療法はこのような先人からの普遍的な考えを基本に、「森林環境」と「医療・福祉」を結び言葉として近年使われるようになりました。

森に気軽に出かけ楽しむ「森林浴」を一步進め、事例や効果を確かめながら進めていく新しい癒しの形です。

ヨーロッパでは、森林と温泉地を活用した森林療法の実践例があり、中でもドイツには「クナイブ療法※」という120年の歴史を持つ自然療法もあります。

近年、わが国でも注目されてきている具体的な森林療法の取り組みには、次のようなものが挙げられます。

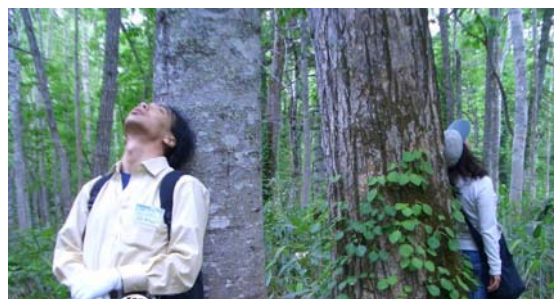
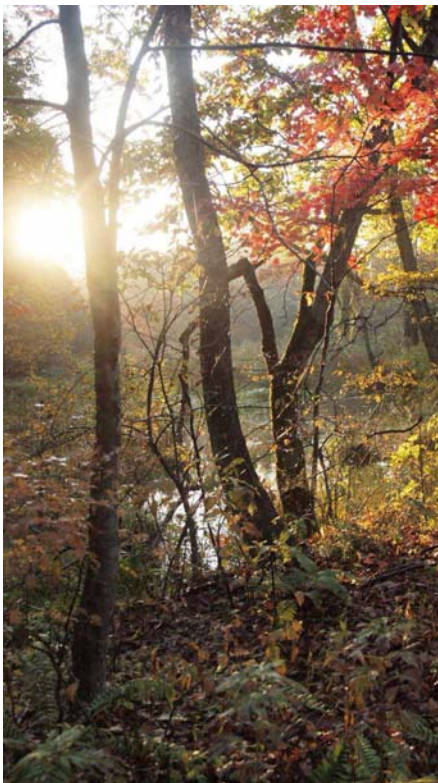
- 森林浴を代表とした森林レクリエーション
- 樹木や林産物を活用した作業療法（園芸療法も含む）
- 森林内を歩きながらのカウンセリングやグループワーク
- 森林の地形や自然を利用した医療リハビリテーション
- 森林における幼児保育
- 林産物を利用したアロマセラピー

林野庁では、森林の保健休養機能の効果について科学的実証を試みてきており、森林浴時には、唾液中のストレスホルモン（コルチゾール）の濃度が低下するとともに前頭前野の活動が鎮静化し、生理的にリラックスしていることがわかっています。

このように、森林には、人々の緊張、不安、気分の落込み、怒りや疲労などを軽減させ、気分をリラックスさせる効果があることが明らかにされ、森林療法の効果は徐々に科学的に解明されつつあります。

※ クナイブ療法とは？

ドイツ南部のバート・ウェーリスホーフェン村のカトリック司祭であったセバスチャン・クナイブによって提唱された自然療法で、水療法、植物療法、食物療法、調和療法、運動療法の5つの治療分野からなる。その中でも根幹となるのは、温・冷水浴による水療法。



～森のようちえんの動き～

幼い頃から自然と触れ合う機会を与え、自然の中でのびのびと遊ばせ、子供の成長を促したい。そんな思いから 1950 年代中頃にデンマークで始まり、北欧を中心に日本では 10 年ほど前から少しずつ広がりを見せている運動です。

特徴はとにかく森＝自然の中で過ごすことを重視している点です。これは森が幼児の発育を促す最良の環境として捉えているからです。

人間が作りだした人工的な空間にくらべ、森の中には土や水に風、木や草、虫や動物といった幼児の成長を促す多様な刺激にあふれています。

そんな森が持つ力とそれを受け取る子どもたちの力を信じ、自主性や好奇心、感性、運動能力をのぼすために指導者や大人は「見守る」保育が中心になっているのも特徴です。

日本では、2004 年に第 1 回の「森のようちえん全国フォーラム」が開催され、全国ネットワークが形成され、自然体験活動を基軸にした子育て、保育、乳児、幼少期教育の総称を「森のようちえん」として広まってきました。現在では、ドイツや北欧でみられるような毎日の預かり保育を目指す人たちが多くなり、県によっては法整備を整え、これをバックアップする動きが盛んになっています。

北海道では第 2 回（登別）第 12 回（大沼）と全国フォーラムが行われ、大きなうねりとなりつつあり、一部法整備を行う動きもあります。

四季が明確で、都市部と豊かな森が隣接し、その森は起伏が大きい北海道は森のようちえんを運営するには最適な環境です。木育と共に、そんな環境を生かした独自の幼児教育、保育が広がっていくことは必須だと思われま



森のようちえん宣言

全ての子ども達にたっぷりの愛と自然のふれあいを。

子育てを支え合い、喜びに満ちあふれた社会の現実を目指します。

子ども達よ、命の根っこを輝かそう。

森で、海で、里で、この空の下で。

森のようちえん全国ネットワーク

2014 年 11 月 24 日



(6) スキャモンの発達・発育曲線と木育

子どもが成長していく中で、器官や機能は個別の発達をしていきます。成長発育を 20 歳でのレベルを 100% として考え、各体の組織の発達・発育していく特徴を 4 つのパターンに分けてグラフ化したものがスキャモンの曲線です。

スキャモンの発達・発育曲線によると、神経系統は生まれてから 5 歳頃までに 80% の成長を遂げ 12 歳でほぼ 100% になります。この時期は、神経系の発達が著しく、さまざまな神経回路が形成されていくことを考えると、多様な環境である森の中に身をおき、あるいはおもちゃに囲まれ、神経回路へ多様な刺激を与えることが、後の大きな成長の下地を作っていくことになると考えられます。

次に5歳～8歳頃の子どもたちは、ギャングエイジなどと呼ばれ、一見集中力が無く、落ち着きがないようにみえますが、そうではなく、とても高い集中力を持ち、常にさまざまな刺激を求めています。ここでは、森や木、道具を使い、多彩な遊びで子どもたちを飽きさせず楽しみながら、多面的な感覚と好奇心を育むことが大切です。

9歳～12歳頃はゴールデンエイジと呼ばれ、神経系の発達がほぼ完成に近づき、安定する時期です。木工などの技術習得には最適な時期です。しかし、その前の幼少期でいろいろな経験をし、神経回路が形成されていることが前提になります。

このように運動系の発育と木育を結びつけて考えていくこともできると思います。

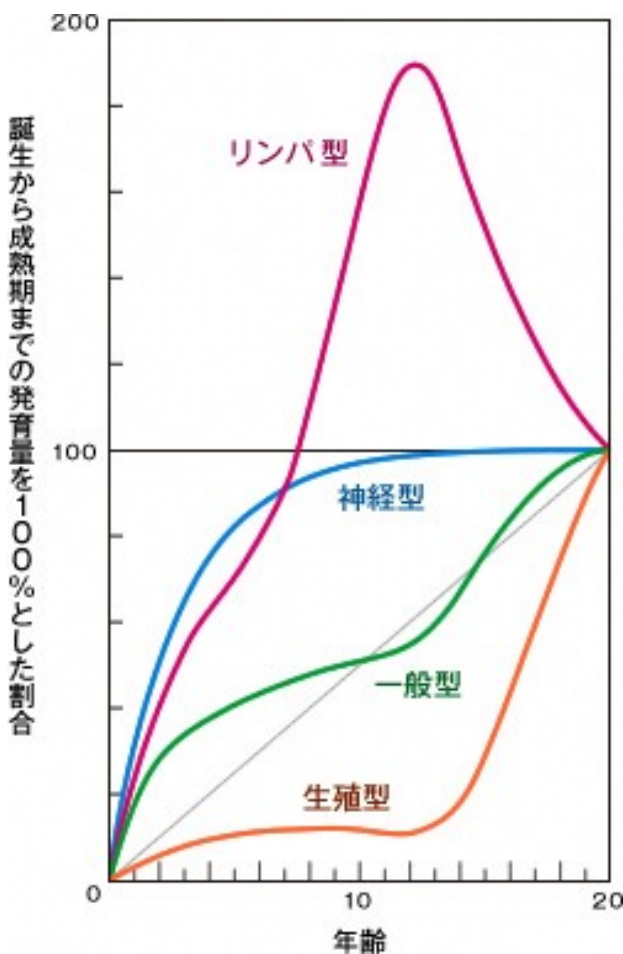


図4-1 スキャモンの発達・発育曲線

(7) 個々の段階にあった活動の提供

木育は、樹木や木材について詳しい人を養成することではなく、自らの行動やライフスタイルを変化させ、北海道の森林やそこから生み出される木材を上手に活用し、共に生きていく人や社会を育むことを目指しています。

そのような人を育てるには一足飛びではなく、ひとつ、ひとつステップを登っていくイメージが必要です。

ただし、これは年齢ではなく、その人の段階を評価し、その段階にあった課題を与えることが大切です。例え、大人であっても、興味関心が薄い人には興味をもってもらう体験が必要ですし、子どもであっても森や木に興味があれば次の知識の獲得につながるような課題を与えるべきです。

北欧の森林教育プログラム「LEAF」では、森の中での直接体験を基本とし、森での経験を日常生活や学習に反映できるように6つのステップに基づいてプログラムが組み立てられています。

これは木育プログラムを考える上でも参考になるのではないのでしょうか。

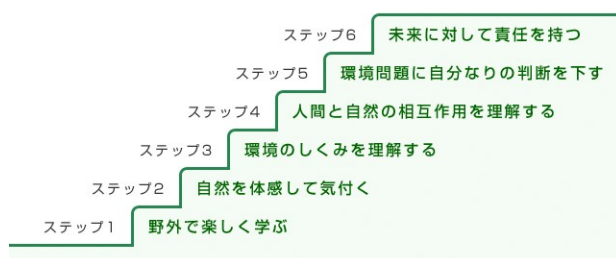


図4-2 FEE Japan LEAF プログラム集 より引用

木とふれあい、木に学び、木と生きる



第 5 章

木育はつながりのキーワード ～プログラムの伝え方～

ここでは、体験を通じて木育の理念へとつなげていく過程を学びましょう。木育とはどういうことなのかを伝えるためには、その時々に応じて、様々な指導法の選択が必要となるでしょう。

木育はつながりの
キーワードだ

1 体験学習法の理解

(1) 体験の重要性

体験学習の基本的な姿勢として、老子の言葉がよく引用されます。

「聞いたことは、忘れる。見たことは、覚える。やったことは、わかる。見つけた（発見した）ことはできる」



アメリカの研究では、この言葉を裏付けるように、次のような調査データも出ています。

- ・[講義] 聞いたことは 10%程度記憶に残る。
- ・[見学] 見たことは 15%程度記憶に残る。
- ・[講義+見学] 聞いて見たことは 20%程度記憶に残る。
- ・[討議] 話し合ったことは 40%程度記憶に残る。
- ・[疑似体験や実体験] 体験したことは 80%程度記憶に残る。
- ・[相互レクチャー] 人に教えたことは 90%程度記憶に残る。

木育の目指すところは、樹木や木材について詳しい人を養成することではありません。自らの行動やライフスタイルを変化させ、北海道の森林やそこから生み出される木材を上手に活用し、ともに生きていく人や社会を育てたいのです。行動を促すには、自らが気付く「体験」が重要になります。木育プログラムでは感覚を使い、参加者の気づきを促すプログラムを実施する指導が求められます。

(2) 体験学習の循環過程

体験から学び、自己変革ができるような人を育てるのは、当然、1回のプログラムでは難しいです。日々の生活の中で木とふれあい、そこから感じ、気づき、日常生活に生かしていく態度が求められます。つまり、木育プログラムでは、この日常の態度（学び方）を同時に学んでもらうことが望ましいでしょう。

ここでは、知識やスキルを獲得しつつ、学び方自体を学ぶ方法として、米国の組織行動学者デビッド・コルブラが提唱する「体験学習モデル」を紹介します。

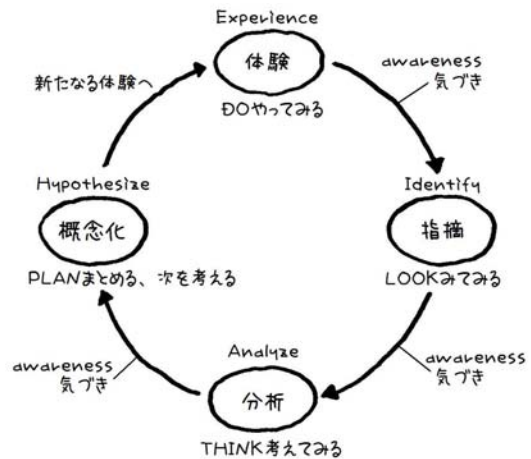


図5-1-① 体験学習法の循環過程

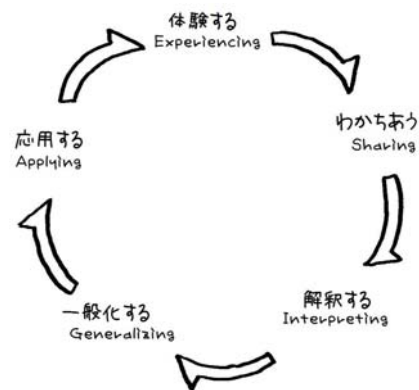


図5-1-② ガウによる循環過程の説明
出典：「ガウの体験学習法」ガウ・B（訳・津村俊充）から改変

体験し、それを観察し、経験したことを抽象的に考え、一般化（応用化）を考え、次の行動に生かしていき、また新たな体験に結び付けていくという循環過程（プロセス）で、学習を組み立てていくことが有効だと考えられています。

(3) フローラーニング

木育は参加者が主体の学習です。参加者が興味を持ち、参加者が学びたいことを参加者のペースで学ぶことで、参加者のモチベーション(動機)を維持していきます。

参加者が興味を持ち続けるには、プログラムの流れ(フローラーニング)を意識する必要があります。一つの活動と活動の関係性やストーリーをつくるということです。切り貼りの木工体験をして、森で遊ぶというプログラムではなく、まず、子どもたちに興味を持たせたあとに木に触れ、その木を加工するといった流れのあるプログラムです。



以下に フローラーニングの代表的なものを紹介します。

- 導入→本体→まとめ
- つかみ→つなぎ→本体→まとめ
(アメリカ国立公園レンジャー用
インタープリテーションテキストの場合)
- 熱意を呼び起こす→感性を研ぎ澄ます→
自然を直接的に体験する→感動を分かち合う
(『ネイチャーゲーム〈1〉-〈4〉』ジョセフ・B・コーネル(柏書房)の場合)



2 伝える技術

(1) 伝え方の種類

物事を伝えていく手法には大きく分けて、3つの手法があるといわれています。

一つ目が「伝達」です。これは、道具の使い方や知識・技術を持っている指導者が持っていない対象者に一方的に伝えていくやり方(講義型)です。

二つ目が「解説・交流」です。学習内容や学習物にふれながら、参加者の疑問などに答えていくやり方(双方向型)です。

三つ目が「参加・変容」です。対象者にあった課題が与えられ、参加者が主体となってそれに取り組み、さまざまな気づきを促していくやり方(参加型)です。

表5-2-① 伝え方の種類と立場

伝え方・種類	立場・名称	伝える内容の例
伝達・伝授(講義型)	指導者(インストラクター)	木工機器の使い方 基礎知識の伝達
解説・交流(双方向型)	解説者(インタープリター)	木の観察
参加・変容(参加型)	促進者(ファシリテーター)	参加者自身の気づきを促す

木育プログラムの目的は、それをきっかけにして、参加者が自身のライフスタイルを森や木を上手に生かしたものに変わっていくこと、つまり行動を促すことです。

それにはやはり、参加者自身が発見し、気づき、納得することが大切です。そのため、手法としては3番目の参加型の伝え方が主となり、プログラムを進行する木育マイスターは促進者(ファシリテーター)の立場が求められます。

参加者にあった課題を設定し、好奇心を引き出し、興味が尽きないよう助言をし、道具や情報などをさりげなく用意しておくことが大切です。また、「待つ」「見守る」ということも求められます。あくまでも、学習の主体は参加者であることを忘れずに、与え過ぎ、教え過ぎないように努めましょう。

参加型・体験学習は、とても時間がかかります。また、多様な気づきを促す半面、必ず伝えたいことがある時には不便です。

効率よく、何かを伝えたい時（全員があるレベルまでには到達していないとプログラムが進行できないなど）には、やはり講義（レクチャー）が必要です。

自然観察などでは双方向型のインタープリテーションという手法がよく用いられます。自然と参加者の間に入り、自然からのメッセージを質問や投げかけを使いながら参加者との交流の中で一緒に解き明かしてしくやり方です。

これは木育プログラムでも、森林や木材の解説には有効な方法です。しかし、木や自然についてあまり知らない参加者にとって双方向型（質問を受けること）は、苦痛の時もあります。その時は、最初の講義型でヒントを与えると良いと思います。

このように3つの手法の利点を生かしうまく組み合わせることが、限られた時間で最大の効果を生み出すコツといえます。



（2）本物にふれ、感覚をつかう

発見や気づき・インスピレーションを促し、より創造的な思考をもたらすためには、より多くの情報量を脳に取り入れなくてはなりません。それは視覚的・聴覚的・言語情報（知識の伝達）だけではなく、様々な感覚を刺激することが大切です。森の木や木材には匂いや手触りなど人間の感覚を刺激するものがたくさんあります。本や映像にはない本物が持つ刺激を感じ取れるように、直接、本物にふれられる機会をたくさん用意しましょう。

また、現代においては、指先から受ける刺激も少なくなっており、不器用な人が増えているといわれています。これは、生活の中で手作業が減っていることも影響しているといわれており、逆に「痴呆（ぼけ）」防止のために手作業が推進されていたりします。そういった意味でも、木育ではモノづくりや手作業の時間を一つの柱にしていきたいと思えます。

（3）言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション

一般的に、人は言語を介してコミュニケーションをとっていると思われていますが、何かを伝えようとしている相手から意味を感じるメッセージを受け取るのは、40%に満たないという研究もあります。言葉で発するメッセージは、対象者にわかりやすくまとめ（起承転結など）、適切な言葉（専門用語を多用しないなど）で行えるようなトレーニングが大切です。

一方で、表現者からメッセージを受け取る残り60%の非言語コミュニケーションとは、立ち姿、表情や目、ジェスチャー、声のトーンといったものです。極端な例でいうと、どんなに素晴らしい内容の話であったとしても、木育の達人（マイスター）の服装がそのメッセージにふさわしくないものであったとしたら、それが伝わりづらいこともあるのです。

場の雰囲気をつくれるように、服装、立ち振る舞い、表情、口調にも気を使うようにしましょう。



3 プログラムの運営とリスクマネジメント

(1) 基本的なスタンス（考え）

日本では安全管理という言葉が一般的ですが、ここでは「リスクマネジメント」という言葉を使います。

森などの自然の中や工具を使ったものづくり体験には、絶対的な安全はなく、かならず危険（リスク）が存在することを認め、それを回避するように準備をしていくという基本姿勢です。また、そういった危険があるからこそ、教育的チャンスがあるということも留意し、過剰に危険を排除せず、プログラムを運営することも大切です。

危険を体験するのは子ども（参加者）、危険に備えておくのが大人（木育の達人）ということです。

(2) 危険はどこに潜んでいるのか

木育プログラムにはどこに危険が潜んでいるのでしょうか？

まず、森などに出掛けて行った際には、自然環境の中に危険が潜んでいるでしょう。気象や地形、倒木、ツタウルシやスズメバチのようなアレルギーを起こす動植物といったものです。



次に、社会的な環境です。道具の不備であったり、参加者のレベルに合っていない課題であったり、無理な計画といったことです。また、精神的な面にも危険は潜んでいます。参加者同士の人間関係であったり、参加者のやる気といったことです。

生理・生物的な危険もあります。病気やケガ、障害といった危険因子です。木育の達人はプログラムの運営に際し、どのような危険があるのか予知できるように、危険因子の可能性を常に考えておくことがリスクに強くなる第一歩です。

(3) 何を把握・管理（マネジメント）しておくときよいか

まずは環境です。実施場所に危険な場所や、動植物はないか。道具（特に大型の危険なもの）の置き場所はここで良いかといったことです。また、救援体制、特に救急医療（病院）までの距離や移送方法といったことも決めておきましょう。

次に、対象者をきちんと理解しておくことです。年齢や人数、経験や理解度、危険察知能力、それから当日のモチベーション（参加動機）の強さや集中力に合わせて課題を変えていくことで、危険を回避していきましょう。道具や服装に関しても、事前にきちんとインフォメーションを出しましょう。

避難する場所や支援体制も確立しておくことも大切ですし、現場では起こったケガや病気に対して救急処置ができるようにトレーニングしておくことも必要です。

(4) 計画段階でのリスクマネジメント

計画段階で、以下の項目でチェックしてみましょう。

- 目的や対象の設定はあっているか？
- 実施場所や施設に問題はないか？
- 運営体制は整っているのか？（特に事故が発生した際の支援体制・連絡体制）
- 実施するプログラムはマイスターの力量に合っているか？



(5) プログラム実施段階でのリスクマネジメント

まず、プログラムに入る前に、事前に危険について参加者へ告知して注意を促します。これは「セーフティトーク」とも呼ばれ、参加者に自身に身を守ってもらうことでリスクを分散すること、指導者が安全に配慮していること（安全配慮義務を果たしている）を表明するねらいがあります。

次のようなことを話します。

- プログラム内容や時間の見通し
- 危険情報（こんな刃物を使います。こんな植物には気を付けてください）
- 服装や持ち物のチェック
- 自己責任で危険を回避するように促す

プログラム実施中も以下のようなことに常に気を配っておきます。

- 実施場所…危険個所の再チェック、移動（道路の横断など）、道具の置き場所、天候
- 参加者 …人数、健康管理、心理状況、弱者の把握
- スタッフ…配置、コミュニケーション、準備の段取り、自身の安全

(6) リスクを最小にするために

事故等が起こってしまった時のために、事故後の対処マニュアルときちんと作っておくと、慌てずに対処できます。また、現場でも応急処置ができるように、消防署や日本赤十字社で行われている講習会に参加し、救急救命などの技術を習得しておきましょう。また、保険にも加入しておくことが大切です。

(7) 保険について

万一の事故に備え、保険に入っておくことも大切です。保険には大きく分けて参加者自身がかかる傷害保険と賠償保険に分かれます。

特に指導者側の過失責任が問題となる場合に備え、賠償責任保険に加入することが重要です。過失責任が問われないように実施することは当然ですが、この活動に100%の安全はありません。自分自身の身を守ることを考え、保険で責任をとるといふ準備も必要です。

指導者自身が入れる保険としてはスポーツ安全協会が運営している保険や JON（日本アウトドアネットワーク）といった団体が加盟者を対象に運営しているもの、指導者資格を発行している団体がかけているもの、民間の会社が行っているものなどがあります。

自分にあった保険を確認しましょう。

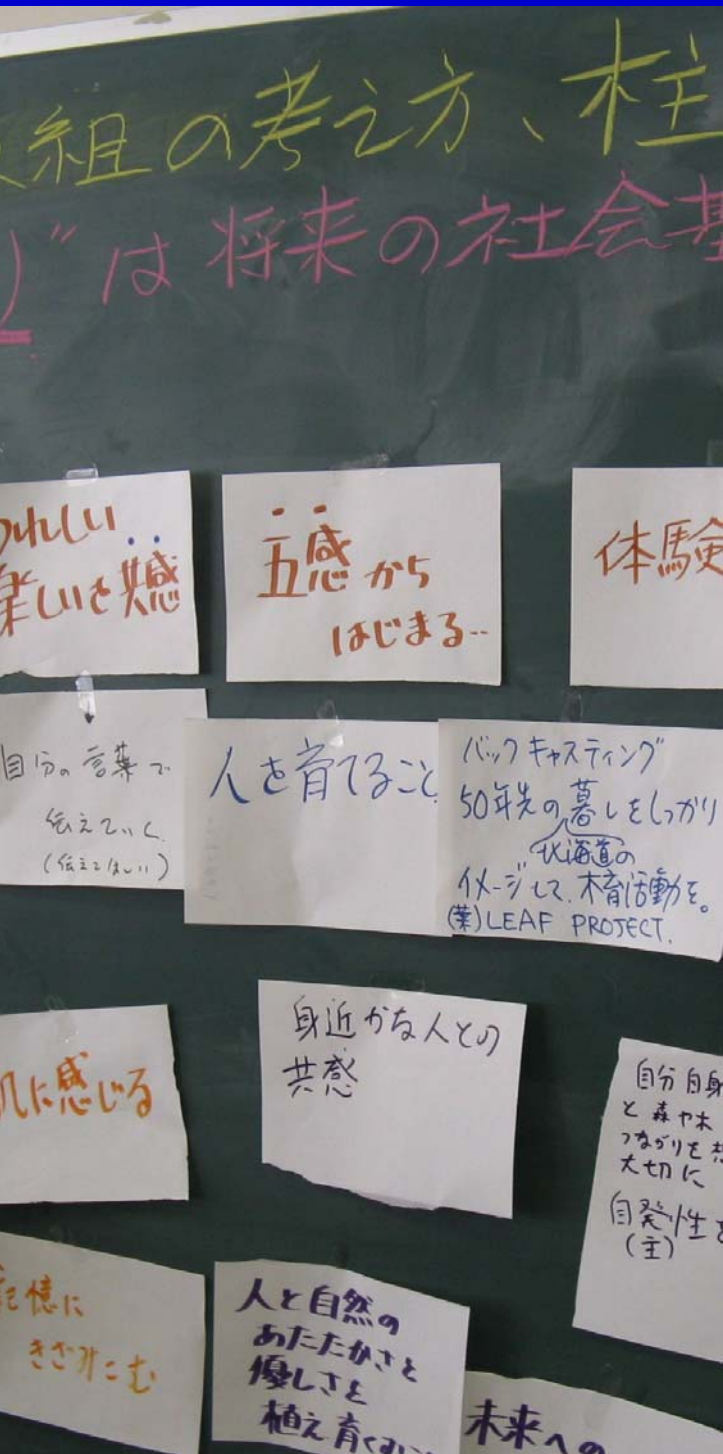


第6章

木育はつながりのキーワード ～プログラムのつくり方～

いよいよ木育を効果的に伝えるためのプログラムづくりについて学びましょう。

木育を伝えるためのコンセプトから、プログラムの構成までの流れを理解しましょう。



1 木育プログラムづくりで大切にしたいこと

(1) いろいろな人をつなげる・つながる

同じ「木」を教材にしながら、森林環境教育分野の人は森林にある立木ばかりを対象にしていたような気がします。逆に木工など、ものづくり教育では、木材については意識をしていました。林業関係者は、木の価値を木材の値段でばかり見ていました。同じ木なのに…。

「第1章 木育の理念」で述べたように、木育では木を身近な循環資源として（社会のつながりを感じられる教材として）活用していくことを目的としています。そのため、プログラムづくり自体も、木に関わるいろいろな人をつながることができることを目指して企画していきましょう。

(2) 木の一生を感じ、自分の生活に持ち帰れるもの

木は人の暮らしに欠かせないものです。水を育み、家や家具の材料となり、癒しや文化、リクリエーションの場を与え、燃料や紙となって私たちの生活を支えてくれている。

木の役割や良さの一面に着目して学ぶのではなく、森と木材、木と私のつながりが感じられ、木（自然）との付き合い方（暮らし）を考えることのできる奥行きのある深いプログラムづくりを大切にしていきたいと思います。

(3) ころと生活、そして自然環境を豊かにするもの

楽しく、格好良い、北海道らしい木の生活文化が営まれ、その恵みをもたらす自然環境を大切に作る心が育まれるよう、プログラムデザインを行いましょ。そのためには、感性に訴え、デザインも意識し、昔からの知恵や技術を再構築するといったライフスタイルを、企画者自身が日頃から意識していることが大切です。プログラムは、企画者を写す鏡であることを意識しましょう。

2 つながりかたのコツ(コーディネート概論)

これまでお話ししたように、木育プログラムをつくっていく際は、みどりいろ（森林を得意としている人）とちやいろ（木材を得意としている人）や子育て、福祉といった異分野の人々を結びつけていくことが、不可欠になってきます。また、そのコラボレーション（組み合わせ）により、新しく面白いプログラムをつくることができます。

その際に、次のようなことを留意しておくこと、両者により良い関係性を築くことができるでしょう。

(1) 相互理解

まずは、一緒にプログラムづくりに参加する人たちの相互認識、相互理解が進むように事前の打ち合わせや実施段階、事後の評価会議を進行していくと良いでしょう。相互理解が進むことで、次回はよりスムーズに進行ができ、また、別の企画が生まれるチャンスも膨らみます。

(2) 共通目的の設定

各人や各団体の木育に取り組む姿勢や思惑はそれぞれです。そのことを尊重しつつも、一緒にプログラムを組む際は、共通の目的・目標について合意して進めることが大切です。それをせずに何となく進めていると、後から「そんなつもりではなかった」ということになります。

(3) 変容性の確保

プログラムをつくっていく際に、最初から決まったプログラムありきでは、参画する人たちのモチベーション（やる気）が削がれてしまいます。話し合いながら、どんどん変わっていても良いという雰囲気でプログラムづくりを進めると、企画者が予想していたものより、良いものが出来上がる時もあります。これこそがコラボレーションの醍醐味です。

(4) 平等性の確保

もちろん、参加する人の誰が偉いとか、中心といったことではなく、フラット（平等）な立場で参画してもらうことは、言うまでもありません。

3 プログラムづくりの基礎

(1) プログラムづくりの流れ

木育プログラムをつくって実施することは、木育の理念に基づいた想い（目的）を「プログラム」という形にして相手に届けることです。誰かに思いを込めたプレゼントを贈る作業と同じです。

まず、相手のことを考え（参加者の状況や必要としていること）、自分が出来ること（予算や技術）を考え、思いを代弁してくれるようなプレゼントを選びます。このプレゼントのことを教育プログラムでは「ねらい」または「コンセプト」と呼んでいます。

プレゼント（ねらい）が決まったら、次は贈り方を考えます。これは、前章の体験学習法やフローラーニングを思い出してください。

次に渡すためには相手呼び出します。これを広報と呼んでいます。

そして、渡し終わったら、気に入ってもらえたのかを探ります（評価）。

これが、プログラムづくりで考えておくべきことです。またその評価に基づき、次のプログラムを考えます。

(2) アクティビティ（活動）とプログラムの関係

手法についてアクティビティ（活動）とプログラムの関係を整理しておきます。実際に何かをすること、例えば、「森に行き、葉っぱを使ってゲームをする」「木片にヤスリをかけて、木のマグネットをつくる」（次章を参考にしてください）などが、それに当たります。

プログラムは、これらのアクティビティを、ねらいが達成でき、かつ参加者が楽しく興味がつきやすい流れを意識して、組み立てたものです。

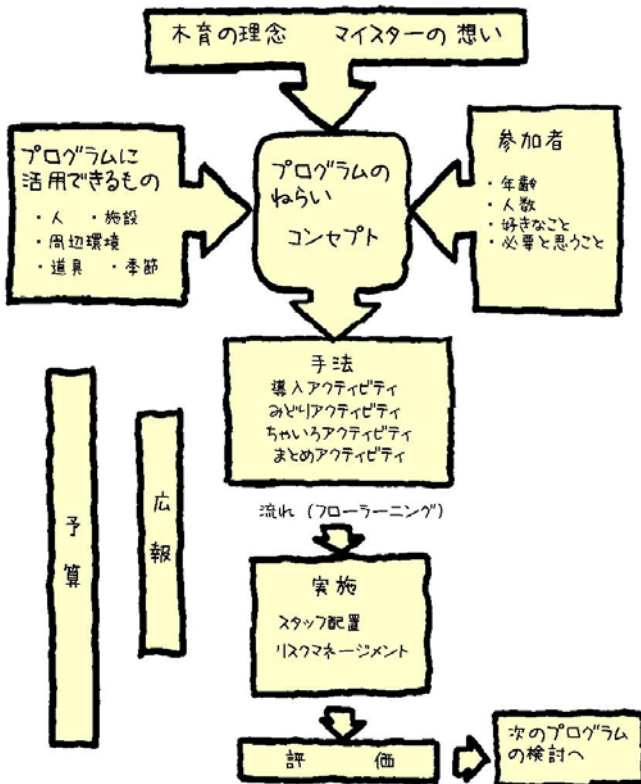


図6-3-① プログラム作りの全体像

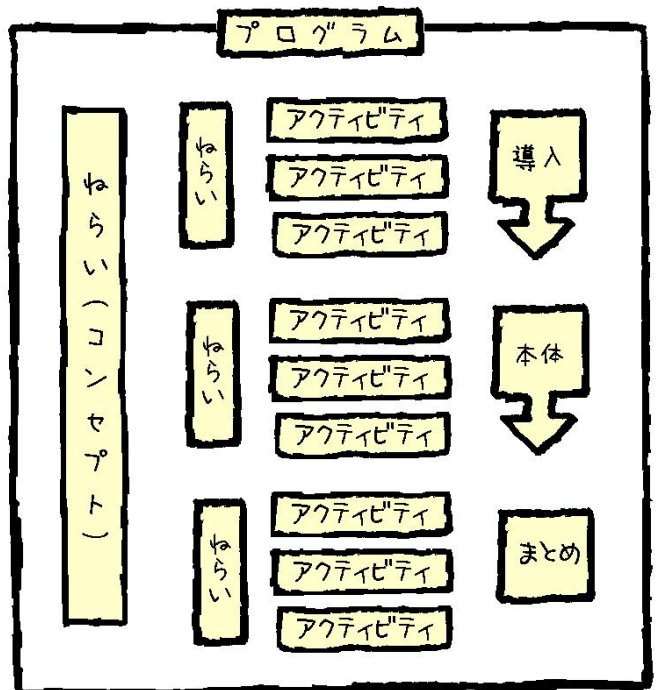


図6-3-② プログラムとアクティビティ

プログラムが「ネックレス」だとすれば、アクティビティは「宝石」、ねらいは「鎖」に当たります。また、一つ一つのアクティビティでも、ねらいや流れはしっかりと意識しておくことが必要です。

木育はつながりのキーワードだ

プログラムづくりの模擬演習

あなたが以下のような2つの異なった条件で木育活動を行うと仮定して、プログラムを作成してみてください。大まかな流れでかまいません。条件は拡大解釈してもいいので、自由な発想で考えてみましょう。

ただし、メインテーマ、目標、活動内容は決めること。簡単なプログラム例も載せておきます。

〔演習1〕都市部に住む小学生に木育教室

- 1) 対象：札幌市内の小学校6年生 約30名
- 2) 場所：道内の森林公園（キャンプ場施設、研修施設あり）
- 3) 時期：9月～11月の土曜日に隔週3回実施。
活動時間は自由設定
- 4) 講師・担当：人数などの制限なし
- 5) 費用（材料費など）：小学生一人あたり500円まで

【プログラム例（概略のみ）】

<テーマ>森を食べる

～人は森と木と共に生きてきた～

<目標>森や木の恵みを感じてみよう

<内容>

- 1日目：「森と木を感じる」
 - ・森を歩く→森や木と生活の関わりについてのレクチャーも
 - ・枝、つる、木の実などをひろう→3日目の燃料集めも兼ねる
 - 2日目：「木でつくる」
 - ・木のスプーンづくり、箸づくり→木の種類によって硬さや木目が違う、適材適所のことなどを知らせてもらう（木くずは3日目の燃料に）
 - 3日目：「木で食べる」
 - ・焚き火をして、きのこ汁を食べる→火おこし体験、今までに集めた枝や木くずも燃料に（木くずを無駄にしない、カーボンオフセットの話もわかりやすくする）
- <留意点>
- ・事前の下見をきっちりと→倒木の危険箇所、有害動植物の確認なども
 - ・刃物の取り扱い方
 - ・火の取り扱い方
 - ・当日の服装・持ち物確認

〔演習2〕5歳児前後の幼児向け木育教室

- 1) 対象：旭川周辺在住の5歳児。親子で参加も可
- 2) 場所：旭川市近郊の幼稚園（広い敷地あり）
- 3) 時期：毎月第2日曜日に3回実施。1回約2時間。季節は自由設定
- 4) 講師・担当：人数などの制限なし
- 5) 費用（材料費など）：幼児一人あたり300円まで

【プログラム例（概略のみ）】

<テーマ>木であそんで、つくってあそんで、
げん「木」な「樹」の子になろう！

<目標>木にふれて、五感とひびきあう感性を育む

<内容>

- 1日目：「木とあそんでみよう」
 - ・木のおもちゃであそぶ
 - ・森の恵みを味わう・さわる
 - ・絵本から学んでみよう
- 2日目：「森にいてみよう」
 - ・森の中でゲームをしよう
 - ・森から恵みを集めてみよう
- 3日目：「つくってみよう」
 - ・森の恵みで楽しくつくろう
 - ・道具をつかってみよう

